

修士論文（要旨）

2013年1月

大学生の対人恐怖心性における攻撃性と自己受容性

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻

211J4012

山本美希

目次

I. 序論	1
1. 問題の背景と所在	1
2. “おびえ”に基づく対人恐怖心性	4
3. 攻撃性	6
4. “おびえ”の側面をもつ対人恐怖心性と“恥”の側面をもつ対人恐怖心性の攻撃性の特徴	7
5. 自己受容性	7
6. 問題の所在のまとめ	8
II. 目的	9
III. 仮説	9
IV. 方法	10
1. 調査対象	10
2. 調査方法	10
3. 質問紙	10
3- (1) 対人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井，2006）	10
3- (2) 対人恐怖心性尺度（堀井・小川，1996，1997）	10
3- (3) 攻撃性質問紙（安立，2001）	10
3- (4) 自己受容性測定スケール（Self-Acceptance Inventory : SAI）（宮沢，1987）	11
4. 統計処理	11
V. 結果	12
1. 尺度の因子構造	12
1- (1) 対人恐怖心性尺度Ⅱと、対人恐怖心性尺度について	12
1- (2) 攻撃性質問紙	15
1- (3) SAI	16
2. “おびえ”“恥”における攻撃性およびSAIの各因子間の関連	18
3. 対人恐怖心性4群における攻撃性と自己受容性の比較	19
3-1. 対人恐怖心性4群における攻撃性得点の差の検討	19
3-1 (1) 「自己攻撃行動」	20
3-1 (2) 「対象攻撃行動」	21
3-1 (3) 「積極的行動」	22
3-2. 対人恐怖心性4群におけるSAI得点の差の検討	22
3-2 (1) 「SAI合計」	23
3-2 (2) 「自己理解」	24
3-2 (3) 「自己信頼」	24
VI. 考察	26
1. 仮説1について	26
2. 仮説2について	27

3. 仮説 3 について.....	28
4. 研究の問題点と今後の課題.....	29
VII. 謝辞	30
引用文献	
資料	

1. 問題の背景と所在

対人恐怖の病態レベルの第1段階は、平均者の青春期という発達段階において一時的にみられるもの(笠原・藤縄・関口・松本, 1972)とされており、青年期にあたる大学生において対人恐怖心性は経験されるものだといえる。西田(1968)の調査により視線恐怖や関係念慮を訴え、“おびえ”るものが増加してきていることが指摘され始め、“恥”から“おびえ”への変遷が指摘される中、従来の“恥”の側面をもつ対人恐怖心性の尺度作成(堀井, 1996:1997)に尽力してきた堀井(2006)も、臨床現場において被害感、迫害感、加害感などを訴え、対人関係におびえた学生が目立つ傾向にあるとして“おびえ”に基づく対人恐怖心性を測定する尺度を作成した。堀井(2006)によると、“おびえ”の心性とは、「対人場面で自己の攻撃性が他者に向けられる、または他者の攻撃性もしくは他者に投影された自己の攻撃性が自己に向けられることによって自己の安全感が損なわれることへの恐怖の心理的傾向」と定義される。本研究はこの定義を採用し“おびえ”に基づく対人恐怖心性の特徴を描き出すことを目的に研究を行う。“おびえ”の側面をもつ対人恐怖者は、敵意や攻撃性の内包(西田, 1968)、破壊性、攻撃性が他者あるいは自己に対して容易に誘発される(西園, 1983)と指摘されており、“恥”の側面をもつ対人恐怖心性は対人攻撃性が高く、衝動的であるといわれている(李・永江, 2005)。また成田(2010)無意識にあったものが意識されて“恥ずかしい”になるのに対し、“怖い”は自己の攻撃性を自覚せず他者に投影しているため、自己受容性に差があると考えられる。したがって、より“おびえ”の心性と“恥”の心性の特徴を細やかにみていくために、攻撃性と自己受容性の比較検討を行う。

2. 目的

大学生を対象とし、近年注目されている対人恐怖心性の“おびえ”という側面について、その特徴を描き出すことを目的とする。そのために、“おびえ”を論じるに不可欠な攻撃性の在り方という視点から、これまでの対人恐怖心性、すなわち対人恐怖心性の“恥”という側面と対比させて論じる。また、対人恐怖心性が経験される時期に重要である自己受容性も合わせて対比させていくことで、対人恐怖心性における“おびえ”の側面と対人恐怖心性における“恥”の側面についての違いをみていく。

3. 仮説

- ① “おびえ”の側面をもつ対人恐怖心性と“恥”の側面をもつ対人恐怖心性は異なる心性である。
- ② “おびえ”の側面をもつ対人恐怖心性は主に攻撃性を内包する、または自己に攻撃性を向ける。それに対し“恥”の側面をもつ対人恐怖心性は攻撃性を対象に向ける。
- ③ “おびえ”の側面をもつ対人恐怖心性も“恥”の側面をもつ対人恐怖心性も自己受容性が低い。また、“おびえ”の方が“恥”よりもさらに自己受容性は低い。

4. 研究方法

都内の大学生を対象とする。フェイスシート(学年、年齢、性別)に加え、以下に記載する尺度を使用する。

- (1) 対人恐怖心性尺度Ⅱ(堀井, 2006): おびえに基づく対人恐怖心性の測定のため、堀井(2006)によって作成された対人恐怖心性尺度Ⅱを用いる。
- (2) 対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1996, 1997): 従来の、あるいは「恥」に基づく対人恐怖

心性の測定のため、堀井・小川（1996，1997）によって作成された対人恐怖心性尺度を用いる。

(3) 攻撃性質問紙（安立，2001）：攻撃性の在り方を細やかに捉えるため、安立（2001）によって作成された攻撃性質問紙を用いる。

(4) 自己受容性測定スケール（Self-Acceptance Inventory：以下 SAI）（宮沢，1987）：自己受容の特徴を捉えるため、宮沢（1987）によって作成された SAI を用いる。

5. 結果と考察

対人恐怖心性尺度Ⅱと対人恐怖心性尺度を混合して因子分析をした結果、2 因子に分かれ、同時に強い相関があった。このことから、対人恐怖心性の中に 2 つの構成概念がある可能性が考えられ、これまでは“恥”から“おびえ”への変遷と言い表されていたが、近年の対人恐怖心性は強く関係のある“恥”と“おびえ”2 つの心性から構成されている可能性が示唆された。

“おびえ”と“恥”それぞれの側面をもつ対人恐怖心性がどのように分かれるかを調査したところ、“おびえ”“恥”心性どちらも強い人が 93 名、“おびえ”“恥”心性どちらも弱い人が 87 名、“おびえ”心性が弱く“恥”心性が強い人が 42 名、“おびえ”心性が強く“恥”心性が弱い人が 17 名という結果であった。西田（1968）、西園（1983）が指摘する“恥”から“おびえ”への変遷は、“恥”の側面をもつ対人恐怖心性が消失し、“おびえ”の側面をもつ対人恐怖心性に移行しているということではなく、“恥”の側面をもつ対人恐怖心性の主症状である赤面恐怖が減少し、関係念慮を主とする“おびえ”の側面をもつ対人恐怖心性が増加しつつある、という指摘にとどまっている。したがって、本研究においても、“恥”から“おびえ”へ変遷したというよりも、“恥”だけでなく“おびえ”の心性を持つ対人恐怖心性が現れ始めたと考えられることができるだろう。

4 群の攻撃性の違いについては、“おびえ”“恥”どちらも強い群は自己に対する攻撃性を内包する、もしくは対象に対して攻撃性を表出する傾向にあった。“おびえ”が強く“恥”が弱い群と“おびえ”が弱く“恥”が強い群において自己および対象に対する攻撃性に差はなかった。

4 群の自己受容性の違いについては、“おびえ”“恥”どちらの心性も強い群は他の 3 群よりも自己受容性が低く、ありのままの自分を受け入れていないことが示唆された。“おびえ”が強く“恥”が弱い群と“おびえ”が弱く“恥”が強い群において自己受容性に差はなかった。

よって、本研究では対人恐怖心性の中に“おびえ”と“恥”2 つの構成概念がある可能性が示され、また対人恐怖心性 4 群で攻撃性と自己受容性に差がみられた。

引用文献

- 安立奈歩 (2001). 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学科紀要 47 475-487
- アブラハム・H・マスロー (著) 上田吉一 (編) 完全なる人間 第2版—魂のめざすもの 誠信書房 p.171-185
- Combs,A.&Snygg,D. (1949). Individual Behavior. New York : Harper&Row.
- エリク・H・エリクソン (著) 西平直・中島由恵 (訳) (2012). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房 p.95-102
- 堀井俊章 (2006). 対人恐怖心性尺度Ⅱの開発—対人関係におけるおびえの心性を測定する試み— 学生相談研究 26 221-232
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報 20 55-65
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報 21 43-51
- 堀井俊章 (2011). 大学生における対人恐怖心性の時代的推移 横浜国立大学教育人間科学部紀要 1. 教育科学 13 149-156
- 教育と医学の会 (編) (2002). 教育と医学 特集・恥について考える 50 (8) 福井康之 恥意識とまなざし pp.65-71
- 稲浪正充・笠原嘉 (1968). 大学生と対人恐怖症 全国大学保健管理協会会誌 4 p.24-28
- 笠原嘉 (1977). 青年期—精神病理学から 中央公論社 p.3-31
- 笠原嘉 (1993). 対人恐怖 加藤正明ら (編) 新版精神医学事典 弘文社 p.515
- 笠原嘉・藤縄昭・関口英雄・松本雅彦 (1972). 正視恐怖・体臭恐怖—主として精神分裂病との境界例について— 医学書院
- 教育と医学の会 (編) (2002). 教育と医学 特集・恥について考える 50 (8) 北西憲二 羞恥と恐怖 対人恐怖者の欲望の観点から pp.51-57
- 北山修 (2002). 対人恐怖 小此木啓吾・北山修編 精神分析事典 岩崎学術出版社 p.320
- 北山忍 (1995). 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究 10 153-167
- 紺真理・相澤直樹 (2011). 青年期における攻撃性について：第二の個体化過程と対人葛藤場面における他者の意図の判断から 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 5(1)9-18
- 松木邦裕 (1996). 対象関係論を学ぶ クライン派精神分析入門 岩崎学術出版社 p.35-47
- Markus,H.,&Kitayama,S. (1991). Culture and the self: Implication,emotion,and motivation. *Psychological Review* 98 224-253
- 宮沢秀次 (1987). 青年期の自己受容性の研究 青年心理学研究 1 2-16
- 森田正馬 (1932). 赤面恐怖 (又は対人恐怖) と其療法 神経質 3 p.172-184
- 中村剛・西村優紀美 (2000). 対人恐怖症 学園の臨床研究 1 23-30
- 成田善弘 (2010). 精神療法面接の多面性—学ぶこと, 伝えること— 金剛出版 p.80-97
- 西田博文 (1968). 青年期神経症の時代的変遷—心因と病像に関して— 児童精神医学とその近接領域 9 225-252
- 西園昌久 (1974). 現代青年の神経症 九州神経精神医学 20 133-137
- 西園昌久 (1983). 対人恐怖と手首自傷—性同一性障害としての理解— 清水将之・村上靖彦編 青年の精神病理 3 弘文堂 p.201-231

- 西園昌久・井上隆則 (1988). 自己臭恐怖 臨床精神医学 17 197-202
- 小川捷之・林洋一・永井徹・白石秀人 (1979). 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究 (1) 比較文化的視点から 横浜国立大学教育学部紀要 19 205-220
- 大淵憲一 (1993). 人を傷つける心：攻撃性の社会心理学 サイエンス社
- 李秀・永江誠司 (2005). 青年期における自己愛と対人恐怖心性が攻撃性に及ぼす影響 教育実践研究 13 145-152
- Rogers, G.W. (1951). Client-Centered Therapy. Boston : Houghton-Mifflin.
- Benedict Ruth (著) 長谷川松治 (訳) (2005). 菊と刀：日本文化の型 講談社 p.11-33
- 桜井利行 (2001) 対人恐怖心性と自己受容性との関連 日本教育心理学会総会論文集 (43) 216
- 桜井利行 (2001) 対人恐怖心性と自己受容性との関連 (2) 日本教育心理学会総会論文集 (44) 294
- 関响一・坂田健 (編) (1988). 大学生の心理—自立とモラトリアムの間にゆれる— 有斐閣 p.206-212
- 谷冬彦 (1995). L3003 「個」—「関係」の葛藤と独立：相互依存的自己 日本教育心理学会総会論文集 (37) 57
- 谷冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖心性 教育心理学研究 45 (3) 254-262
- 太宰瑞希・佐野秀樹 (2012) 大学生の対人恐怖心性と攻撃性の関連について 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 63 (1) 187-194
- 津田佳子 (1998). 青年期と中年期における対人恐怖心性の比較—自尊心、タイプ A 行動パターン、攻撃性からの検討— (平成 9 年度発達臨床心理学専攻修士学位論文概要) 名古屋大学教育學部紀要. 心理学 45 209-2107
- 山崎俊輔 (2008). 青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連 九州大学心理学研究 9 143-151
- 山下格 (1977). 対人恐怖 金原出版